



PRO-LIFE NEWS

(中絶に反対する運動)

〒780 高知市新本町一丁目七番三十一号

一番つらかった夜

登録看護婦としての12年間には苦しい夜が何度もありました。死は病院で起こりがちです。それは予測されている事もあるし、不意にやってくる事もあります。この年月を振り返ると充血性の心臓病で苦しんでいた80代の女性を思い出します。家族がベットの横に座り、最後の呼吸の間、彼女の手を握っていました。また、仕事から家に帰る途中、飲酒運転のトラックに跳ねられた、まだ30代の男性のことも思い出されます。私はその事故の現場であまりのショックに虚ろな目をしている人を見ました。病院へ運ぶ途中、彼を蘇生させようとする私達の懸命の努力にもかかわらず、その若い男性は救急車の後部で亡くなりました。それは私に

とって、つらい夜でしたが、一番つらい夜はまだ来ていなかったのです。数年前的ある夏の夜、集中療の新生児室は特別に多忙でした。私がその夜に交替勤務を始めた時、部屋の中が異様な緊張状態である事にすぐ気づきました。その日、他の病院から緊急の要求があり、私の病院の輸送チームは3人の乳児を運んできました。3人は私達の新生児室が行える特別治療を必要としており、3人のうち2人は非常に危険な状態でした。困難な夜になるのは明らかでした。

次に私達を襲ってきたのは予想外の事でした。私たちがその時一番手がすいていたので、それが私の担当となりました。分娩室の看護婦が私達の部屋に毛布

を抱えて歩いてくると、「人工中絶なんだけど、心臓の鼓動があるので、ここへ連れてきたの。」と言いました。赤ん坊は放射線房のそばに置かれ、私は残りの事実を聞かされました。その赤ん坊は超音波によつて妊娠23週目と言われ、母親はガンを患っており、妊娠を知らずに化学療法の治療を受けてしまったのです。赤ん坊は化学療法の影響で不具になるだろうと両親に伝えられました。

私は目の前に横たわっている男の赤ちゃんを眺めました。どう見てもその子は完璧でした。しっかりと強い心臓の鼓動がありました。聴診器を使わなくても、それは分かりました。胸が心臓の速度で動くのが見えたからです。聴診器を使うと心臓が力強くポンプの作用をしているのが聞こえました。体の大きさと皮膚をみても明らか

に23週より成長しているように見えました。体重も九百グラムありました。これはわたしたちがいままでに命を救ってきた何人かの赤ん坊の2倍近くになります。ドクターが呼び出されました。彼女が到着すると赤ん坊が動き出し、小さな手足を振り回しました。喘ごうとしましたが、肺に空気を送り込む事は出来ませんでした。呼吸をしようとしても体全体がふるえていました。新生児の先生もやってきたので私は両先生にお願いしました。「この赤ちゃんは生存能力があります。体の大きさと皮膚をみてください。23週よりずっと大きく見えるでしょう!」

それは恐ろしい瞬間でした。私たちはそれぞれ自分身の倫理規範を持って闘いました。私は彼を蘇生させ呼吸をさせるべきだと主張しました。医者はいくつかは中絶なんだ。我々

は妨げる権利はない」と私に言いました。

結局、私は負けました。私たちは赤ん坊を蘇生させない事になったのです。

だから私は出来る事だけをしようと思いました。まず人差し指を殺菌した水にちよつと浸して赤ん坊の頭につけ、洗礼を施しました。それから寒くないように毛布でくるんであげました。もつとたくさんのお腹を上げてたかつたのに、あの状況で赤ん坊を慰めるために私に出来たのはそれだけでした。私は呼吸をしようと思いでいる赤ん坊を抱きしめました。彼はまだ自分自身の力で生きようとしているのです。涙が私の頬を流れ落ちました。私は、神がこの小さな赤ん坊をご加護の下にいられ、また彼の死への私の関与をお許し下さるよう祈りました。しばらくすると赤ん坊は喘ぐのを止めました。彼の心臓

は鼓動を続けていますが、それはだんだんゆっくりと弱くなっていき、ついに停止しました。彼は亡くなったのです。

私とその赤ん坊の死を見届けた場所から1m50cmも離れていないところで、医者や看護婦は非常に危険な状態の乳児の回りに集まっていました。医者たちはその赤ん坊を救命するために出来る限りの治療を行っていました。それはとても皮肉な事だと思えました。私は赤ん坊を抱いて一人で立っていました。この子には助かる可能性が充分にあったのに、私たちは何もしてあげませんでした。

「看護婦」

親と十代の性

自己価値

すべての親は、自分の息子や娘のものの感じ方が彼らの生活のあらゆる面に影響を及ぼすことを知っている。そこで親は自分の子どもに生活に調子を合わせることを要求される。これは、子どもが「ローラーコースター」的な感情を持っているほど挑戦的なものになる。それを実行するには子どもの成長と共に引き続きの事が必要となる。親としては、健全な自己価値観の見極め方を明確にすることが求められる。例として

* 安全だけれど、少しは危険を冒すかもしれないこと、あるいは何か新しいことを試そうとや

る気を見せること。

* 「この人から何を得られるか」という考えの上に立った友達関係を作らないで、真の友達関係を持つこと

* 「あのプロジェクトはいいで良かった。」など、自分に積極的な評価をすること。

* お世辞を受け入れる力を持つこと。

* 自分を傷つけないこと。

* 進んで責任を取ること。

* 気持ち・感情の豊かさを示すこと。

* ストレスをうまく押さえること。

* 他人に影響を及ぼすという事を実感すること。

分とかからずにするから

だろつ。しかし、それ以上に自己価値を促すことがある。自己価値は基本が出来てから若者に出来てくる。クレメスとビーン(一九八八年)は、高度な自己

価値観は子ども及び十代の若者が次の四つの異なった状況で前向きな感情を経験することによって得られるとしている。

(A) 関係維持：

十代の若者が他人との意義ある関係から得られる満足感やその関係は他人と接することによって確認される。考え方としては次のようなことが挙げられる：

* 最低週一回は家族とともに食事をする。

* 人と交流を持ち、人の話に耳を傾ける。

* 親族の集いや伝統を

大切にし、一員として楽しく興味深い活動やイベントに参加する。

あなたは親として自分の子どもの付き合っているグループを良しとするか。学校のクラブやスポーツ・チームなど、他にどんなグループに所属しているのか。あなたあるいはあなたの子どもの「つながり」方を考えてみよう。

(B) 独自性：

十代の若者達が自分の性格を感じてそれを尊敬できる、あるいは自分が特別だと感じられる時の特別な感情のこと。若者が直面する最も複雑な問題の一つが「つながりを持ちながら」同時に「独自性を持たなければならぬ」事である。興味深いこの相反する彼らの望みは、仲間と同じようにしたいと思いな

がら、全く同じではいやだという事である。覚えておいた方が良い例を挙げておこう。

- * 彼らをくじけさせてはいけない。
- * かつこいいい、かわいいという事を口にしてあげる。
- * 他人を助けるために創造力を生かすように励ます。
- * 物事を行う際の新しい方法を考え出す。
- * 料理や洗車など、家族のために特技を生かす。
- * 子どもが一員だと感じられるような活動の場を設ける。

(C) 力：

力とは、自分の生活を意義あるものにするための資源やチャンス、そして能力を持つ事で手にする事のできる感覚である。十代の若者には自分達が得意

とする何かを見つける事が必要とされる。誰にとっても自分を他の世界から区別するための特技が必要である。何かがあればその特技をさらに磨く事ができるのである。新しい事にまつたく挑戦しなければ、せっかく持っている特技も成功をみないままになってしまふ。

* 「感じて、考えて、そして行動する」というパターンを思い出そう。子どもが自分の感情を理解し、コントロールすることができ、合理的に行動することができ、よりいっそうの力を感じる事ができるだろう。

* 趣味やスポーツなどで、自分を他の世界から区別できる活動例を分かち合おう。

* 家族のおきてや問題解決に子どもを参加させる。

* 時に、家族のために出

来るガイドラインを決める。

* 創造的な集いやデート、その他の活動を計画する。

(D) 模範：

十代の若者が意義ある価値観や目標、理想、そして個人的な標準を設定するためにその模範を示してくれる人々は、彼らの人間としてのアイデンティティーを確立するのに非常に重要な存在である。その模範は未来を考える上でとても大切なのである。若者はしばしば自分たちがしたい事よりも、大人がこうしろと言ったように行動する。目標は規則とは違つて、若者自身によって決められ、そして受け入れられるものでなければならぬ。これらの事は良い模範があつて実現できる。

* 若者の実力に見合った目標を設定するよう協力する。

* 若者に自己評価の仕方を教える際に模範は重要となる。

* 文化的理解を促進させる行事に参加する。

* 信条や価値観について議論する。

* 参考になるヒーローを見つける。

以上の四つの条件が、自己に対する高い価値観を發展させ維持させるために常に備わっていないければならない。どの条件もすべて同等に重要である。ど

の一つが欠けようと、自己への価値観は満足の行かないものになってしまう。つまり、自己価値観はバランスの保たれたものの方にかかわっているのである。

語りと「選択」

キャロリン

スーザン

私のいとこのスーザンは、「殺人者？それはちよつと過酷な言い方ではない？中絶の目的は、赤ちゃんを「殺す」事ではなくて、問題を「解決」する事なのだから。」と言います。

望まない妊娠の問題点は、もう一つの口を養わなければならぬ事です。両親に対しては、自分を大切にできなかった「証しにもなりません。社交活動も終わります。望まない妊娠の問題点は、子どもなのです。つまり「子ども」「問題」であるから、中絶の目的は、「子どもを「殺す」事」でなくて、子どもを「解決」する事だと言つのでしょ

同僚のキャロリンは17歳で父親のいない赤ちゃんをお腹に抱えて7ヶ月になります。昔はよかつたスタイルも今では風船のようです。彼女は街中に住んでいて、この子を育てる手段を、経済的に持つていません。

でもなぜ、何故キャロリンは赤ちゃんを堕さないのでしょうか？

「あなたにどんな権利があると言つても、赤ちゃんがお腹の中にいるのを感じると、あの小さな足でお腹をけつ飛ばすのを、この地球上の誰にも妨げる事はできない、と思つわ。」

ミーガン・グリーン

『避妊と中絶・致命的なつながり』

私は以前から何回も、生命擁護運動は、人工的な避妊法に反対であると指摘してきました。子どもを産む間隔をあげるため、自然な方法しか支持していません。避妊と中絶とのつながりをつくつてしまうと、

私たちの正義が崩されてしまふという事を評論家たちが私に教えてくれています。

外科的中絶による殺人を20年間も続けてきました。そして今、RU486(これはもつぱら殺人者である)などの新種の避妊薬ができています。このような事実があるのですから、まだ避妊と中絶とのつながりを疑う事ができるのでしょうか？私はジャネット・スミス教授が同じように思っているのと知つてうれしく思います。最近の記事で、彼女は次のように指

摘しています。

「避妊と中絶とのつながりは次のようになっていきます：避妊は、中絶するよくな人間関係を助長し、さらにはそのような態度や道徳的特性をも助長することにもなります。避妊を望む考え方は、赤ちゃんが性交による『事故』であるように考え、性的関係の間に入り込んできた歓迎されないものであり、負担であるかのように扱います。性改革には、性交と赤ちゃんとのつながりのための余地はないのです。性改革というものが、単に、確実な避妊具が有効になるまでは可能でなかったという事です」。

「性改革への歯止めになるにはほど遠く、避妊は性改革の始まりを助長させ、性改革を荒れ狂うまで続

けさせる燃料になつてしまつているのです」。もし私たちが避妊と中絶とのつながりを知ることができなければ、さらに20年ほどが過ぎ、さらに何百万人が死ぬことになりかねないので。

「もしあなたたち生命擁護家たちが本当に中絶をやめさせたいと考えているなら、我々と一緒に良い避妊の方法を考えて下さい！」と中絶賛成者は抗議します。いいえ！私は再びスミス教授の言葉を借ります。彼女は、なぜ中絶賛成者たちが「自由」という言葉を信じられないほど強調し、なぜあまりに急いで私たちをその考えの中に引き入れようとしているのかを説明してくれています。彼らが望むのは、何が善と真であるかを

追求するための真の自由ではなく、どちらかと言えば『許可』に似ている自由、何が善と真であるかには関係なく、やりたいことができる自由を欲しいと思っているのです。

ここが鍵なのです。避妊を推奨する人たちは、赤ちゃんが性交の結果であることは認識しています、が、受け入れようとはしていません。そのため、彼らは言葉を巧みに使い、自分の達の計画ではなく、神の計画に従う時、赤ちゃんができることがあるという事を一般の人々に覚えさせないようしようとしています。もしかすると、このせいで、「生殖の自由」と「生殖の権利」とが、いつも「女性の選択する権利」と「選択の自由」とつながりを持っているのかも知れません。

生命擁護家たちは、避妊と中絶とのつながりを知る必要が絶対にあるので

す！そしてその事を語り、

指摘し、他の人達に真実を教えなくてはならないのです。なぜなら、抑制のない性を支持する人達が横行している限り、胎児には平和がないからです。RU486のような殺人薬物が存在する以上、私達はただ椅子に座り、「中絶には反対ですが、避妊に対しては特別主張はありません」と言ってはいられないのです。

ジユディー・ブラウン

アメリカ生命連盟

(American Life League)

会長

癒される傷

【見よ、わたしはあなたをわたしの手のひらに刻みつける。

イザヤ49：16】

息子は予定日より数週間遅れて、死んで生まれてきた。赤ちゃんの到来を目前にした興奮や期待は悲しみに取って代わり、いまだに私達の心は痛み、かわいしいヨセフと決して共にする事のできない将来を夢見ている状況だ。

ところが、たくさんの人達が息子を埋葬する際に一緒に祈りを捧げてくれ、私達はあふれるばかりの神の愛を感じた。カトリック教会はこのような死産の赤ちゃんたちのために「天使のミサ」という特別なミサを行ってくれる。ひな菊に白い風船、子ども

歌声。すべてが私の幼い頃の取るに足らない喜びを思い出させるものである。息子と分かち合うことのできない喜びである。

私たちはこの日を特別な日にしなければならぬ。なぜなら、この日こそヨセフの短かった命とその死を公に認める日だから。これからの生活でヨセフの面影やこの子への愛が常に思い出されるだろう。私たちの愛情は、言葉の交わされないものとなってしまう。

流産や死産、あるいは中絶によって子どもを失った親にとって最も耐え難いのは、こんにちにはのあいさつをきちんとする前にさよならをしなければならぬ事である。ヨセフとは、時間の代わりに永遠の時があり、悲しみの代わりに喜びがあり、そしてさよならなど存在しない天国で会えることを楽しみにするしかないのだ。

お世話になった病院の関係者は口々に同じことを言って、子供の命が子宮の中で終わろうと、生後すぐに終わろうと、その子の「個性」を認め、祝福してあげなければならぬ、という内容の本をくれた。それには、「人間はその名前を覚えられずに死んではいならない。そんなことになつたら、人間として数えてもらえなくなってしまうからだ。」と書いてあった。さらに別の本には、「胎児がどんなに小さくても、あなたの赤ちゃんだという事を忘れてはならない。」とあった。

これらの本を読んで不思議に思ったのだが、何百万という中絶された子ども達が、医療関係者や政治家や恐らく私たちすべての人間によって全く違つた定義のされ方をしているという事だった。私たちの息子は、必要とされ、育まれ、大事にされてきた

め、妊娠八ヶ月での死は認められ、私たちの悲しみも理解してもらえた。このことは私にとつては大きな慰めになったのであるが、必要とされず無計画にできてしまった子の中絶による死は、世間に認めてもらえないのだと気づいた時、私は呆然としてしまった。赤ちゃんたちはその死に方によって、また死ぬ施設によって、世間に認めてもらえなくなってしまうのだ。

しかし、赤ちゃんが薬の合併症で死のうと、意図的な中絶で死のうと、その子が死んだ事には変わりはない。このような子ども達の母親への支えや繊細さが足りないのは、単に子どもが目に見えないからといって、生まれる前の子を「本物」だと感じる事ができないためである。

しかし、子どもの母親やその家族はからっぽのイメージと重すぎる罪悪感

に悩まされ、失った愛情をあきらめ切れずにいる。中絶を「個人の決断」だと決めつける社会は、その女性や家族を孤独な苦痛に陥れてしまう。中絶業界は中絶後の精神的衝撃の事実を強く否定し、女性に罪悪感をもたらせるのは生命尊重派のせいだと言いつつ、同じ理屈で彼らは女性にわが子の死を悼む権利も必要性も認めない。このような態度はモラルや母親の子どもを生むという本能を否定している。しかしながら、悲しみに明け暮れる母親の心を突き刺すのは、実はこの母親としての本能そのものなのである。なぜなら、子どもは死ぬべきはずではないのだから。

わが子の死を経験した時、回りの人々を通じて神の愛を感じとれたので、私たちも神のメッセンジャーとして、中絶や流産で子どもを亡くした人々

に癒しの愛を伝えなければならぬと感じた。思い切り悲しめる事によってのみ、神の愛と慈悲を完全に体験できるのだから。私たちがまずしなければならぬのは、どうにかしてこの小さな死者たちを思い出し、記憶に留める事により神への償いをし、子どもを亡くして、悲しみに一人で耐えている母親に対しては、とがめるのではなく深い同情心をもって接して行くことである。神の助けがあるから、私たちは幾重にも重なる否定の層を破る事ができ、真実を認める事が出来る。いつの日かその子に巡り会った時、名前呼び、祝福しながらお互いに抱きあえるのだから。

メアリー・

リンツイグラ

違いのよくわからない人へ

中絶。今や大きな社会問題になっていきます。中絶が何故悪いかわからないという人が大勢います。私の考えをお話ししましょうか。たった一言で簡単に言い表せません。それは、中絶が「殺人行為」だからです。殺人。私が中絶に関して思うのはこの言葉の他ありません。もう少しわかりやすく説明しましょうか。あなた方が新聞を読むたび、TVニュースを見るたび、ギャング間闘争や人が殺されたとか殺人がどのように行われたかなどというニュースを目にするでしょう。人の命が軽視されているかのような事件を見て、人は皆ショックを受けます。このようなニュースの中に時折母親が生まれたばかり

の赤ん坊をゴミ箱に捨てているのを誰かが見つけたといった事件があります。ニュースを知った人はこの事件にもショックを受けるでしょう。その行為が殺人行為であると思っからです。その通り。母親は赤ん坊が邪魔になり、子どもをゴミ収集所に捨てた。放っておけば赤ん坊はまちがいなく死ぬ運命にある。人はこれを殺人とみなします。

しかし、その同じ赤ん坊が生まれてくる二ヶ月前に中絶された場合と一体どのような違いがあるのでしょうか。これも殺人人ではないですか？私から見ればこれも殺人です。同じことです。三ヶ月でも四ヶ月でもさかのぼってごらん下さい。十月十日胎内で育った末、分娩の苦しみの中生み落とされ、古くなった靴同様にゴミ捨て場に捨てられる子どもと、妊娠何ヶ月目であるかと

中絶される子どもと同じ子どもには変わりないのです。皆さんの中には私に賛成しかねるといふ人もたくさんいらっしやることはよくわかっています。何故か私にはわかりませんが、でもそういった方々は、今私が非常に単純な例でお話しした事をよく考えて下さい。私から見ると胎内の赤ん坊を中絶することも、生まれた子どもをゴミ捨て場に捨てて置くことも同じ殺人です。このことをよく考えて、違いがわからなくて混乱している頭を一緒にはっきりさせようではありませんか。そうすれば私達にも何かできるかもしれない。私達が幾人かの命を救うことができるかもしれない。

シーザー・デノヴァ

「TVタレント」

カトリック教会中絶反対運動

長期に渡って中絶反対の意を表明していたカトリック教会が、胎児はれっきとした人間であるとの確固とした宗教的見地からなる証言をさらに確かなものとしていくだろう。ずっと昔から、カトリック教会は中絶を糾弾し続けてきた。例えば現行のカトリック教会規律では、中絶は、発達段階にある胎児の排除行為のみならず、受精の瞬間から何週間であるか、どれだけ人間の形をしているかに関係なく、一人の人間を殺害する行為である」としている。カトリック教会は、このように人間の生命を尊重することにより、中絶は「殺人」とであると明言している。

今日カトリック教会は、中絶を容認するリベラル派の自称「カトリック」団体に頭を悩ませているものの、中絶には断固として反対の姿勢を保ち続けている。紀元一世紀より今日に至るまで記録され保管され続けてきた莫大な量のカトリック教会の記録を見れば、その中絶に対する道徳的見解の一貫した姿勢がうかがえるだろう。カルカッタのマザー・テレサなら、胎内には侵すべからざる生命が存在し、その生命をカトリック教会が社会とともに一団となつて保護するべきだとの見解を最も説得力ある表現で語ってくれることだろう。以下はマザー・テレサの発言からの引用である。

「今日世界の平和を破壊している最大の原因は、罪なくして生まれる前に中絶されてしまった赤ん坊の泣き声があちこちで聞かれることではないでしょうか。自分自身の体の中にいる我が子を母親が殺してもいいのならば、私やあなた方がお互いに殺し合いをしたとしても同じく正当なこととなってしまうのではないのでしょうか。」

また、ローマ法王ジョン・パウロ2世は、一九八十年代アメリカ訪問中に次のように胎児の人間性について簡潔に語った。「全ての人類は、いかに弱くとも、いかに力なくとも、いかに若くとも、いかに年とつていようと、いかに健康であるつと、いかに身体的障害があるつと、また病気であるつとも、いかに社会にとって有益で、また生産的であるつとも、なかるつとも、その存在ははかりしれない価値を持つものであり、神が御自身の分身として御自分の姿に似せられて創りたもうた貴重な生命であります。全ての人類を、とりわけま

だ生まれこない胎児のような最も弱く力なき存在を尊重するということは、世界の尊厳に関わることであり、世界が存在する意義そのものであり、この世が存在してゆける条件でもあり、そして、そうです、私達人間がともに平和に尊敬しあつて住み、この世界の偉大なることを示すための究極のチャレンジであると云えるでしょう。そしてそれが救いの道でもあるのです。」

Is The Fetus Human?-1991